UEDA
Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報
みすず
No.51
2024.12
題字 幼児教育学科２年 滝澤 愛来

今だからこそ本を

幼児教育学科 専任講師 小出 真奈美

幼少期の子どもたちに絵本の読み聞かせが効果的なように、青年期においても読書や本に触れることは、後の人生において必要な読み書き能力や計算能力、IT スキルに大きな影響を与えることが示唆されています（Joanna et al.,2019）。青年期に少なくとも 80 冊の本が家庭にあるとその効果が発揮されるようです。皆さんのご自宅ではいかがでしょうか？

近年は幼少期の子どもの身体能力の低下だけでなく、視力低下が問題となっています。ファミリーレストランや電車の中などいたるところで幼少期のうちからスマートフォンやタブレットといった情報端末機器を手にし、親とコミュニケーションをとることもなく、子どもたちが画面とにらめっこをする場面を多く目にします。とくによく見るのは、子どもが機嫌を損ねると、親はすぐに情報端末機器を子どもに渡す場面です。子どもは、自分の気持ちや感情を言葉ではうまく表現できません。泣いたり、機嫌を悪くしたりすることでサインを出し、親はそれを察知し、抱っこをしたり、おむつを替えたり、一緒に遊んだりと子どもが何を求めているのかを探っていきます。その過程こそが子どもにとって社会的スキルや自尊感情を高めるためには重要です。また子どもは、家庭環境に関わらず成長・発達の過程において、自らの身体を使って神経を刺激し、身体能力を高めていきます。しかし、情報端末機器を与えることで子どもの動きが抑制され、身体能力の低下や視力低下など結果として身体に様々な悪影響を及ぼしています。ここで重要なのは、誰が悪いということではなく、すでに現実として起きてしまっていることをそれぞれの立場でどのように改善していくかを考えることです。例えば、情報端末機器が幼少期の子どもたちに及ぼす影響について、科学的なデータをもとに保護者に伝えることや、情報端末機器以外のツールを利用してコミュニケーションをとることなど多くの改善策が挙げられそうです。

保育者を目指す幼児教育学科の多くの学生の中には、読み聞かせのために久しぶりに本に触れたという学生もいるのではないでしょうか。また、両学科ともに本にはほとんど触れていないという学生も少なくないのではないでしょうか。私は、今年度の４月に本学に着任しましたが、とても立派な附属図書館に驚きました。学び舎として十分すぎるほどの書籍数と機能だと思います。青年期に多くの本に触れることが今後の皆さんのスキルを高めることは冒頭に紹介させていただきました。保育者となる人、一般企業に就職する人、進学する人、様々な進路が皆さんにはあると思いますが、どの進路を選択しても基礎的な読み書き能力、計算能力、IT スキルは必ず必要となります。しかし、そのために必ずしも本を 80 冊読まなければいけないというわけではありません。とにかく多くの本がある環境で、本に囲まれたところで過ごすことが重要であると考えられています。

皆さんは今、本に囲まれた生活をしていますか？自宅には本がないという方も、これまで本に触れてこなかったという方も本学の附属図書館にぜひ足を運び、生涯にわたって必要となるスキルを高めましょう。また、本は勉強するために読まなくてもいいと思います。暇つぶしや娯楽として本に触れるという選択肢もあります。空き時間にスマホを眺めて過ごしているみなさん、家に帰ったら YouTube や SNS ばかりを見ている皆さん、ぜひその時間に本を手にしてはどうでしょうか？または、附属図書館や本屋という本に囲まれた場所で時間をつぶしてみてはどうでしょうか？せっかく毎日大学に来ているのだから、１日のうちの５分間でもいいので図書館に出向き、まずは本を手に取り、ページをめくってみませんか？ちょっとしたことですが、本に触れる機会を増やすことで卒業時の皆さんの能力がより高くなるかもしれません。２年間の学生生活はあっという間です。時間もお金も自分の成長のために使える今だからこそ、本と接してみてはいかがでしょうか？

絵本の魅力

幼児教育学科１年　田中　美羽

みなさんは小さい頃に絵本を読んだことはありますか？ほとんどの人が読み聞かせをしてもらったり、自分で読んだりした経験があると思います。私は、特に『バムとケロ』シリーズや『ミッケ』シリーズが好きで何回も読んでいました。皆さんの中にもこのシリーズを知っている人や、読んだことのある人が大勢いるのではないでしょうか。

しかし、同じ絵本を読んでいても、みんながみんな同じ感性を持っているわけではないので、それぞれが絵本を通して学んだことや感じたこと、考えたことなどは全然違うはずです。そこが絵本の楽しさの一つだと思うし、魅力だと言えるでしょう。

絵本には感性や表現力を豊かにし、想像力を広げるとても大切な役割があります。大人になってもう一度読んでみると、見え方や感じたことが、小さい頃と全然違っていたりすると思います。みなさんも、小さい頃に読んでいた絵本や大好きだった絵本を、大人になった今、もう一度読み返してみると新しい発見ができるかもしれません。

思い出の絵本

幼児教育学科２年　小林　加穂子

皆さんは、子どもの頃に好きだった絵本はありますか？

私は『ちょっとだけ』という絵本が好きでした。この絵本は“なっちゃん”という女の子がお姉ちゃんになり、赤ちゃんのお世話で忙しいお母さんの姿を見かねて色んなことを自分でやろうと頑張る姿が描かれています。また、お姉ちゃんになったことで感じる切なさ、そしてそれを乗り越えることで成長していく子どもの姿が、お母さんの愛情と共に表現されています。特に最後のお母さんに抱っこしてもらう場面がお気に入りで“なっちゃん”の素直な気持ちが温かく描かれています。

私自身、長女ということもあり自分と重なる部分があったからこそ、親しみが湧き、好きになったのだと思います。今見ても、子どもの素直な気持ちやお母さんの温もりなどを感じられる、懐かしい絵本だなと感じます。

皆さんも思い出のある絵本、好きだった絵本を手に取って読み返してみるのも良いかもしれませんね。

私が出会った本

総合文化学科１年　永井　瑚青

私は中学時代、文字ばかりの小説に苦手意識を持っていました。映像や音がある映画やアニメに比べると魅力を感じませんでした。しかし、高校生の頃、友達に一冊の本を勧められました。それが『夜明けのすべて』という小説です。

この本は、障がいを抱える２人の男女がお互いに支え合っていく物語です。この本を読んで、障がいを持つ方がどのようなことを考えているのか、また、どのような向き合い方をすれば良いのか考えることができました。昔から遠ざけていた読書から、こんなにも多くのことを得られるとは思いませんでした。どれも自分のためになることばかりで、この本に出会えてよかったと思います。

映画やアニメなど事前に作られている映像と違って、文字だけでも会話のシーンや風景など一つひとつ自分で想像することができて、本を読んでいて楽しいと思いました。今回紹介した本は映画化もされているので、映画と合わせてぜひ読んでみてください。

あたらしいおもいで

総合文化学科２年　戸塚　星海

子供の頃に読んだ本は記憶に残りやすいと言われます。私が特に記憶に残っている本は『アリババと40人の盗賊』です。小学生の頃、母親が毎晩読んでくれた絵本です。少し残酷な話で、イラストや文章が大人向けですが、私はとても好きで鮮明に覚えています。一日中、楽しみにしていたにもかかわらず、最後の３ページを聞けずに寝てしまうのがお決まりでした。あの時はじめて本にのめり込み、明日の夜が楽しみで、でも終わるのが切なく、終わるたびに「もう一度初めから読んで！」と何度もせがんで読んでもらったことは、今でも忘れられない大切な思い出です。

本は知識だけではなく思い出も与えてくれます。同じ本だったとしても、年齢やその時の生き方によって感じ方が違います。だからこそ一冊一冊に物語の記憶だけでなく、自分の人生の思い出も本と一緒に記憶されます。

新しい思い出、新しい出会いを作ってみませんか？

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本 Vol.10

幼児教育学科 **大塚 美奈子 先生**

わたしの読書の中から

「東大発！ １万人の子どもが変わったハマるおうち読書」

笹沼颯太 著　ディスカバー・トェンティワン

子どもが読書にハマるオンライン「Yondemy」ヨンデミーを立ち上げた著者。読み聞かせから自力読みへの移行の仕方や子どものレベルに合った本の選び方などが参考になります。読書の価値に気づく内容です。

これは読んでおこうー教員・研究者の立場から

「跳びはねる思考」―会話のできない自閉症の僕が考えていること―

東田直樹 著　イースト・ブレス

22 歳の重度の自閉症者である東田さん自身が、人と会話をすることができなくても心の中に言葉をもっていることを素直に語っています。インクルーシブな世界を考える上で、非常に参考になる内容です。

「耳が聞こえなくたって―聴力０の世界で見つけた私らしい生き方―」

牧野友香子 著　KADOKAWA

生まれつき耳が聞こえないが読唇で会話する著者が、大学からソニーに就職し、難病の長女を出産。その後、難病児を支援する会社を起業した。想像以上の苦労の中で「聞こえたらいいのに」と思ったことは一度もないという前向きな姿に勇気がでます。

総合文化学科 **岡村 綾華 先生**

わたしの読書の中から

「アイデアのつくり方」

ジェームス・W・ヤング 著　今井茂雄訳，竹内均解説　阪急コミュニケーションズ

アイデアを生み育む考え方・方法が端的にまとめられている。在学中課題実践の中で読み、「これでいいのか」と理解と自信をもらった一冊。

これは読んでおこうー教員・研究者の立場から

「センス・オブ・ワンダー」

レイチェル・カーソン 著　上遠恵子訳，川内倫子写真　新潮社

世界の美しさや不思議に出会い、驚きと喜びを“感じる”こと。アイデアの源、この世界を生きていく探究を詩的に優しく励ます遺作。解説エッセイも見どころ。

「哲学入門」

三木清 著　岩波書店

「哲学は現実の中から生まれる。」我々が生き・死ぬる底である“現実”を出発点に、科学・哲学・行為・知識といった機能を見つめ、そのつながりや相違の様々なパターンを思考する。創造することと相似する。

新刊 2024年 本学教員の新刊著作（今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書）

小出 真奈美 先生

「学校保健ハンドブック〈第８次改訂〉」

株式会社ぎょうせい　2024 年 4 月　（分担執筆書）

井 上 奈 智 先生

「図書館員が知りたい著作権 80 問」

公益社団法人日本図書館協会　2024 年 10 月　（分担執筆書）

図 書 館 ガ イ ド

1 自動貸出返却装置が新しくなりました！

カウンター前に設置している自動貸出返却装置が、2024 年 3 月に新しい機械になりました。タッチパネル式になりましたが、操作方法は以前とほとんど変わりません。人感センサーがついており、装置の前に立つと画面が切り替わる仕様で、エラー等があると音が鳴って教えてくれます。一般図書の他に、紙芝居やパネルシアターなどもこの装置で貸出・返却が可能です（CD や DVD は必ずカウンターで貸出してくださいね！）。使い方が分からない場合は、お気軽に職員にお声がけください。

2 授業と図書館のコラボレーション

附属図書館では、季節のイベントに合わせて館内の装飾を変えたり、テーマブックス（絵本の展示）を変えたりしています。今年度は幼児教育学科の授業で、おやことしょかん Biv の装飾や梅雨のテーマブックス、おすすめ絵本の紹介 POP を、総合文化学科　図書館司書課程の授業では、ハロウィンのテーマブックスと装飾を作ってもらいました。今までは過去に作った装飾を季節ごとに飾っているだけでしたが、今年は学生たちが作ってくれた新しい装飾で図書館が彩られ、いつもと違った雰囲気になりました。絵本を借りに来る附属幼稚園の園児たちも、かわいい装飾に釘付けです！

授業で図書館を利用してもらうことが増え、学生のみなさんにとって、図書館がより身近な場所になってきたのではないでしょうか。本を読む、調べものをする、レポートを作るといった学習の場としてだけでなく、心休まる「居場所」として、図書館は学生のみなさんに寄り添っていきたいと思います。授業はもちろんですが、ただ休憩する、一息つくためだけにも図書館に来てみてくださいね。

3 所蔵するボードゲームが増えました

2023 年から本格的にボードゲームを収集し始め、少しずつコレクションが充実してきました。所蔵しているボードゲームは、主にゼミのアイスブレイクやレクリエーション、授業で使用されています。最近では、空き時間に友だちと楽しむために貸出を希望する学生も増えてきました。

10 月 26 日（土）開催の学海祭では、附属図書館の公開講座の一環として、昨年度に引き続き『ボードゲーム交流会』を行ないました。チラシを見て来てくれた親子や、偶然立ち寄ってくれた県外の方など、様々な方にご参加いただきました。初対面でも盛り上がり、世代関係なく仲良くなれるのがボードゲームの魅力なのだと改めて実感しました。

総合文化学科の井上先生によると、大学図書館でボードゲーム類を館外貸出したのは、本学附属図書館が初めてなのでは…!? とのこと。思わぬところで日本初（かも）!? になれたことに驚きました。

ボードゲームは、ただ遊ぶための玩具というだけではなく、人と人とをつなぐコミュニケーションツールとして、楽しく学ぶためのアイテムとして、「あそび」の情報資源としてなど、様々な意味を持って図書館に所蔵されています。学生のみなさんにたくさん使ってもらいたいので、気軽に借りに来てくださいね！リクエストなどもあったらぜひ教えてください！

編 集 後 記

昨年の『おやことしょかん Biv』の開設以降、附属図書館では、本学教員が担当する複数の授業科目と連携したり、ボードゲーム交流会に代表されるように学内行事のプログラムの一部を担ったりと、“アクティブであること”をモットーに動いてきました。アクティブであるとは、ときににぎやかでもあるということ。“静”の学びを保証しつつも、上小圏域における高等教育機関附属の図書館としてはおそらく異例の、活気にあふれた“動”の学びを可能にする場、加えて、それを地域に生きる子育て家庭にも開かれた場にできたら･･･と、試行錯誤の道探しは続きます。新しい図書館像を模索する旅。ご一緒いただける方はぜひ、お気軽に、本学附属図書館カウンターまで！

附属図書館長　多田　幸子

みすず
上田女子短期大学附属図書館報　第 51 号　2024.12 発行
編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会　発行：上田女子短期大学附属図書館
〒386-1214 長野県上田市下之郷乙 620　TEL•FAX：0268-38-6019　E-mail：lib@uedawjc.ac.jp